

令和2年度第4回宮崎県社会教育委員会議

【議事録】

令和3年1月27日(水)

県庁附属棟303・305号室

【生涯学習の視点に立った社会教育の在り方について～SDGsの観点から～】

進 行	SDGsのテーマである誰一人として取り残さないという視点から、現状として学校や地域で取り残されている、つながれていないと感じる人や、今後つながりが必要になることが予想される人たちについて意見をお願いしたい。
委 員	保護者として、子どもたちの行事と自治会の行事が重なり、自治会の行事に参加する機会が減っていく等、どうしてもつながりが減っていくことに課題がある。
委 員	地域のつながりが強いところはお互いが助け合う体制があり、災害時には若い世代が高齢者を救助するなど、地域ぐるみで避難するといったことができている。地域活動において、つながりが薄くなっている部分はあるが、子ども会の活動が活発化されている地域ではつながりが強く、継続した活動ができている。
委 員	コロナ禍で、4月くらいに学校が休校になり、生活リズムを崩して不登校になっていたり、小・中学生、高校生、大学生までもオンラインの学習が続く中、友達と会えない状況で、退学したり、ひきこもりになったりと、オンラインで友達と関わる機会が増えているにもかかわらず、こうした問題が起きている。中山間地域では、特に高齢の女性は外に出ていない状況もあり、小学生から高齢者まで引きこもり現象が起きていると感じている。
委 員	大学ではオンラインで授業ができるようになった。オンラインでも顔を見せるとつながっていると感じるようで、今までのつながりを生かしながら顔を見せる、声を聞かせることでつながりをつくらうとはしている。ただ、高齢者はこういった環境にない状況で、つながりをどう保つかが必要と感じている。また、親子と地域とのつながりについては、どういった場合にうまくつながることができるかを知りたい。
委 員	子ども会や自治会の活動については、新型コロナウイルスの影響で行事がなくなってよかったという意見を聞くこともあり、それだけ保護者の負担感があるのかも思う。行事の統合等、見直しをし、保護者の負担感を考慮した仕掛けが必要である。
委 員	コロナ禍ではつながりと言われても、学校では、感染防止のために外部とのつながりをもたないようにしているので難しい。ただし、学校が再開されてから、自粛期間中につながれていないことによる子どもたちの不安やストレスは、大人が感じている以上のものがあつたことが分かった。本来であれば、学校においては、挨拶運動やグラウンドゴルフ等、地域とのつながりもあるが、コロナ禍ではつながれない状況にあり、地域とのつながりをどうつくっていくかを考える必要がある。
委 員	今回協議しているつながりとは、コロナ禍以前の社会におけるつながりを踏まえた話合いなのか、それともコロナ禍におけるつながりについての話合いなのかを確認したい。
事務局	コロナ禍は1つの社会変化であり、こういった状況を踏まえた意見は今後の参考となると考える。また、コロナ禍以前の社会において取り残されていた子どもや社会人にも目を向け、コロナ禍だけでなく、これまでの現状とともに御意見をいただきたい。
委 員	今までの生涯学習に参加している人は意識の高い人が多いと思うが、その一方、全く参加していない人もいる。誰一人取り残さないためには、対象者の学習への意識に

委員	<p>関して調査研究を行い、意識に応じた対策を考えた方がよいのではないかと考える。</p> <p>PTA 活動等への参加者は、ずっと関わっている人の参加が多い状況がある。これまで参加していない人にも興味をもってもらうために、柔らかな感じの講座を開いた学校もあるが、なかなか結びつかない。参加できない要因によってかけるアプローチが変わってくるので、どうして活動に結びつかないかの調査研究することは有効ではないかと考える。</p>
委員	<p>取り残されるという話でいくと、活動に参加してもらう動機付け等もあるが、今心配されるのは一人暮らしの高齢者のことが心配される。独居老人の見守り等が行われているが、一方向になっている場合もあり、インフラ的に双方向で結びつきができるようなシステムがあるとよいと考える。その中で、単に参加を求めるだけではなく、高齢者の知恵や経験を生かせるような機会を提供できるインフラ整備を考えてはどうかと思う。ICT であれば、どの程度楽しめるのか、どの程度役立つのか、どの程度の負担がかかるのかが分かる最低限の情報を提供する工夫ができれば参加してもらうチャンスを作れるのではないかと思う。</p>
委員	<p>現在、周りに子育て世代や働き世代が多い地域で生活しているが、コロナ禍においては、つながる機会がほとんどない状況である。こういった状況を踏まえると、誰一人取り残さないために、人と人とのつながりをどうつくっていくかを考えることは難しいと感じる。</p>
委員	<p>青少年の健全育成に携わっている立場として、SDGs の観点から、広く子どもたちに気候変動、環境といったことにも意識を高めていきたいと思っている。また、コロナ禍で気付いたことはつながりが希薄なことである。過疎化が進行していくことは国民的レベルで感じていることであり、意識を高めるような手立てが必要である。気軽につながれるようなツールを早い段階から慣れさせる取組やネットワークを構築するようなライフライン等、ハード面でも整備が必要である。</p>
委員	<p>コロナ禍ではあるが、文部科学省も自然体験活動を推進しており、〇〇市でも事業を行った。昨年度よりも応募数が増えていることから、活動意欲とともに、自然体験活動の場を提供する必要性を感じた。子どもたちから高齢者まで取り残さないためには、関心度別のアプローチをしたり、ネットでもつながれることを考えるとタブレット端末の配置等、インフラ整備をしたりしていくことも必要である。</p>
委員	<p>コロナ禍においては、高齢者が報道で取り上げられることが多く、不要不急の外出は控えましょうという状況で、公民館や高齢者の行事はほぼなく、活動ができていない。コロナが落ち着いたときに、誰一人取り残さないというよりも、一人でも多くの人に参加してもらうためにどのような取組ができるかを考えることが大切である。しかし、今は見通しがもてない状況である。</p>
委員	<p>インフラ整備も必要であるが、直ちには難しいことを考えると、今あるものをどう活用するかという視点が大切である。また、コロナ禍において、実際に会うことでつながることができない状況だからこそ、実際に会うことへの欲求、ニーズが高まり、どのような取組をするかによって社会教育にとってチャンスとなり得ると考える。</p>
委員	<p>誰一人取り残さないという観点から、引きこもりを解消する事例として、通信制の高校に通う生徒へ支援をしているが、個別に関わることでできることがあると考える。また、コロナ禍において、感染防止の観点から人数等、制限はあるが、自然体験活動のニーズは高まっており、新しいプログラムの開発を行うなどして対応している</p>

委員	<p>状況である。対面で会うことが難しい状況ではあるが、引きこもりの解消にはオンラインは有効であるし、小さいエリアに居場所をつくることはできるのではないかと考える。今後もコロナの影響が続くと考えると、いろいろな可能性を試しながら開発していく必要がある。</p> <p>社会教育への参加については一律ではなく、それぞれの立場やニーズ等を考えた社会教育参加の方法を考えていくことが、誰一人も取り残さないことにつながっていくのではないかと考える。</p>
----	--

【班別協議】 県庁3号館303号室

進行	<p>全体会を受けて各世代や世代間を通したつながりをつくる具体策を伺いたい。</p> <p>まず、〇〇町の少年期における事例を紹介したい。〇〇町には、学校支援センターがあり、学校支援員を公募により121名集めて、各学校への支援を行い、学校や子どもと地域住民をつなぐ役目を果たしている。</p>
委員	<p>少年世代への教育は、社会参画や人とつながることの意識付けをする上で大切であり、そういった意味でも、大人が後ろ姿で見せることが必要ではないかと考える。社会参画や人とつながることを面倒だと思っている家庭では、子どもも面倒だと思ふような傾向があり、人や社会に貢献する意識を家庭教育や学校教育で育てることが大切ではないかと思う。そして、少年期に意識付けができれば、次の世代にもつながると考える。</p>
委員	<p>前々回の会議で、子どもが、地域で自分が役に立っているとか、自分がいることに価値があると感じると、地域に関わろうとするという意見があったが、そうした価値付けのできる活動を行うことが大切だと思う。大人でも、自分を生かせる作業であれば主体的に取り組むものであり、今ある活動の中でも、活動することの価値を子どもたちに気付かせるような働きかけが必要だと感じる。そうすることで、子どもたちが自分自身の価値に気付くことにもつながるのではないかと考える。</p>
事務局	<p>現段階で、子どもたちに関わる中で、価値あるものだという事に気付かせる働きかけが学校や地域、家庭でできているか。</p>
委員	<p>夏祭りや秋祭り、奉仕活動等、地域で子どもたちが必要とされる場や機会があり、子どもたちに参加は促しているが、自分が関わっていることのよさや価値に気付かせる仕組みや働きかけまでには至っていない。</p>
委員	<p>小学校の低・中学年の場合、地域の活動に参加して、達成感を感じるのには難しいのではないかと。それより参加している地域の人の喜ぶ姿を見ることの積み重ねによって、参加してよかったなといった思いが育まれていくのではないかと考える。現在進められているコミュニティ・スクールの構想の中には、地域の人が学校に入ったり、子どもたちも地域に出たりといったつながりをつくることも含まれていると思うが、〇〇市内の中学校で、地域の人と一緒に防災訓練をした学校があった。その際、中学生が受付や誘導等の手伝いをしてくれたことに地域の人が感謝したり、中学生が地域や地域住民のことを改めて知ったりする機会にもなっていた。このような中学生や高校生が地域の人と接したり、地域に関わったりする活動をしていくことが、その後の地域とのつながりにもつながっていくと思う。</p>
委員	<p>各世代間をつなぐには、公立あるいは自治公民館と地元の小学校や中学校が連携することが大事ではないかと思う。また、行事への参加を呼びかけるだけではなく、何</p>

委員	<p>が目的や趣旨なのか、事前に説明することも必要ではないかと感じている。</p> <p>子どもができて、地域に目を向けるようになったとき、子どもを連れて地域の公園の草刈りに参加したことがある。これをきっかけに、地域の人が子どもに声をかけてくれるようになり、つながりができた経験がある。これまでの話を伺っていても、親が面倒くさがりなところも多分にあるが、地域への活動に子どもだけの参加は難しく、親が率先してというのが大事であるとする。大人が地域の祭りや行事、防災訓練に参加して、地域の活動に参加することのよさを親子で共感することが大切ではないかと考える。ただし、どうやって参加を増やすためにどうするかが課題である。</p>
進行委員	<p>さきほど地域で防災訓練を行っているという意見があったが、他の地域でも同じように行っているのかを伺いたい。</p>
委員	<p>〇〇町では、小学生・中学生が合同で防災訓練は行う学校や保護者が参加する場合もあるが、地域とは行っていない現状である。</p>
進行委員	<p>次は、保護者がつながる場としてはどういったことが考えられるかを伺いたい。</p> <p>P T A活動がつながる場の一つになると思う。コロナ禍では、子どもたちの学校生活を守るために P T A 活動をしなないと決めた学校もあるが、保護者からなかなか知合いが増えない、先生の顔も分からないといった話を聞くと、P T A 活動から距離を置いてしまう保護者もいるが、つながりをもちたいという保護者もいると感じる。</p>
進行委員	<p>つながりをつくる場の事例報告となるが、太宰府市の水城小学校では、校内の空き教室に設置したコミュニティ・スクール事務局を拠点として、地域コーディネーターが活動することにより、地区行事への児童の参加等、相乗効果があったとのことである。その他にいろいろな機会を通じたつながりづくりの事例はないか伺いたい。</p>
委員	<p>同世代同士のつながりは子どもがいることでつくれるが、世代間のつながりがなかなかないことから、世代間の交流を図っていく必要があると考える。防災訓練は義務的などころはあるものの、高齢者をはじめ多くの世代間がつながる可能性はある。しかし、その後がない。何かあったときに助け合えることが大切であり、その時だけではなく、互いの顔が見えるような世代間交流の場をつくるのが大切だと考える。</p>
進行委員	<p>〇〇市の子ども食堂の研修会に参加した際、子ども食堂のねらいは地域のつながりづくりであるという話を伺った。</p>
委員	<p>自分が関わっている一つの事例として、働いている大人と高校生をつなげる活動を行うことで、世代間交流ができていくと思う。キャリア教育の視点から行っている活動であり、この活動を通して、宮崎に残ってみようと考えたり、大学生になってからも高校生にしてみたいと参加したりする学生もいる。それなりに自分にメリットがあれば、参加しようという気持ちになれると思う。保護者については、保護者が地域活動に参加すると、子どもも地域活動に参加する傾向があることから、防災訓練、P T A 活動等への参加機会とともに、いつでも来ていいよというオープンな場所等、つながり合えるいろいろな種類のことを準備する必要があるのではないかと考える。</p>
委員	<p>世代間をつないでいる一つの事例として、〇〇地区では、戦後から始まった運動会が現在も続いている。その中には、幼児から60歳までの住民が走る人生リレー等がある。なくしてはならないという思いが地域にあり、今では地区住民の誇りとなっている。</p>
委員	<p>県全域で人生リレーのような各世代をつなぐようなイベントはあるのか。県全体での事業として考えた場合、こういった取組も面白いと思う。</p>

進 行	<p>各世代あるいは世代全体がつながるための具体的な方策について御意見をいただきたい。</p>
委 員	<p>コロナ明けが前提になるが、地域社会に対するつながりについては、コロナによってこれまでは経験の継承で来ていたものが途切れた状態になっているからこそ、再構築するチャンスである。例えば、PTA 活動、教職員の働き方改革などによりこれまでと同様の活動がやりづらくなっており、ロータリークラブや商工会議所の青年部等、地域社会における団体との連携がますます重要になってくると考える。保護者の中にはやらされているという感覚から抜けきれない保護者もあり、以前であればソフトボール、今であればサッカーといったことで親と子どもとのつながりをつくってもよい。難しいことをする必要はなく、SDGs の観点から考えても、優しさ、気付き、受け止めが大切であり、挨拶を交わすなど、お互いの声かけからでも変わってくると思う。各種団体に属していると強制的にやらされているという感覚に陥ってしまいがちであり、説得ではなく、納得で動いていただくことが大切である。</p>
進 行	<p>やらされ感があると、最初はスタートできても継続しない。持続可能なものにするためには、楽しく、積極的にいきたいと思えるような感覚で取り組めるものにするのが大切であり、そうすることが人を集めることにもつながると考える。</p>
委 員	<p>コロナ禍における実践事例を、いくつか挙げたい。〇〇町は大学が遠いため、大学との関わりをつくるのが課題の 1 つである。その課題解消のため、数年前から〇〇町を題材としたスタディツアーに取り組んできた。しかし、コロナ禍では実施ができなため、地元で取材した様子を動画配信するなど、オンラインで開催している。また、大学生を実行委員としてオンラインのアルバイトで雇い、関係人口を増やすための政策提案をしてもらい、採択した提案の実践活動の中で地域を巻き込みつつ、動画配信をすることで〇〇町の魅力発信につなげており、取組を通してつながりが広がっている状況である。</p>
委 員	<p>現在、コロナ禍で職を失う人が増えている状況もあり、SDGs の貧困に関わる事例を紹介したい。体験活動の提供とともに学習支援を目的として、生活困窮家庭を対象とした〇〇スクールを、〇〇市福祉課にも協力をいただきながら、NPO 法人〇〇と共催して 1 泊 2 日で実施した。今回、NPO 法人〇〇と連携したことで、大学生の意識の高さに感心や楽しみながら主体性をもって取り組んでいる姿、活動のノウハウについて、大変勉強させられた。今後も、教育施設を中心に活動するボランティア養成講座での連携も考えており、強制的にやらされるのではなく、楽しみながら自分たちで事業を構築するなど、主体的に取り組める働きかけをしていく計画をしている。これは地域社会にも共通することと考える。</p>
委 員	<p>コロナが起きたことが新たな気付きにもつながっていると考えている。子どもの貧困や高齢者の福祉については、アウトリーチをキーワードに流れが生じており、宅食やフードパントリーといったアウトリーチの活動に切り替わってきている。誰一人取り残さないということにつながることであるが、地域に関われない人たちが、こちらからのアクセスで関わり始めている状況がある。現在、コロナで困窮している家庭も増えているが、元々困窮していた一人親家庭からの依頼が殺到しており、そのニーズに応じてフードバンクを立ち上げたところである。そういったアウトリーチ活動の広がりがつながるツールとなって、子ども食堂に携わっている人たちだけでなく、困</p>

	<p>窮支援者や主任児童員、民生委員等、いろいろな人たちの参加が見られるようになってきている。このことから、つながるツールはいろいろあるが、こちらから入るというアウトリーチも必要ではないかと思う。また、デイサービスも運営しているが、公民館等が閉館されたことで運動する機会が減り、デイサービスの利用者が増えている傾向が見られる。こういった状況にもオンラインの活用やアウトリーチ活動等、アプローチを変えて対応することは有効ではないか考える。</p>
委員	<p>現在、人と人がつながる拠点である公民館が閉館され、人が集まれない、人と人がつながれない状況が生まれているが、コロナ禍の中で、いろいろな知恵を出しながら工夫した活動が行われていることから考えると、今だからこそ、人と人をつなげる等、公民館ならではの役割を果たすことができるのではないかと思う。</p>
進行	<p>公民館等、社会教育施設に制限がかかり、活動ができない状況の中、これまでの固定観念から脱却しながら、思考を変えて新たな発想をもとに取り組んでいくことでいろいろな道が開け、コロナ禍がチャンスにつながるのではないかと考える。</p>
委員	<p>女性団体の事例で、公民館に位置付けられている婦人会はあるものの、実質的な組織としての活動がなくなっている。そういう状況の中、50代から60代の女性を中心に、LINEによるつながりが地域に広がり、50人程度のネットワークができあがっている。このネットワークの活動は強制ではなく、LINEでのつぶやきに興味をもった人が集まって、廃校を使った体力づくりやオーガニックコットンプロジェクトなどの活動をしており、不審者対応などの防犯にも役立っている。こうした事例から考えると、地域住民がつながる場づくりをすることが大切であり、情報さえ届けば継続した活動につながっていくと考える。</p>
委員	<p>各地域でどのように活動が行われていて、どういった実効性があるのかをキャッチする機会が普段はなかなかないが、事例を伺っていると、楽しければ持続していくものであり、このような楽しさや社会的有用感、自己肯定感等をどうくすぐっていくかポイントであると考え。</p>
委員	<p>地域づくりを包括的に取り組んでいく参考として、50代から60代の人たちがLINEを使ってつながるようになったきっかけがあれば教えていただきたい。</p>
委員	<p>5、6人の女性が廃校の活用について協議したことがきっかけで、各個人のつながりによって広がり続けて、緩やかなネットワークができている。</p>
進行	<p>聞いていてワクワクするような実践を伺うことができ、改めて社会教育活動ができたらいいなという思いにさせられた。今後の大事になると思われるキーワードがいくつも出てきたと思う。ありがとうございました。</p>